

I 研究主題

確かな学力を身につけさせるための指導法の改善

—— 算数少人数指導・習熟度別指導，教科担任制を通して ——

II 主題設定の理由

1 今日の教育課題から

変化の激しい社会の中で，児童が将来にわたり主体的創造的に生きていくために，今教育界では「確かな学力」「豊かな人間性」「健康や体力」で構成される『生きる力』をはぐくむことが強く求められている。とりわけ、『生きる力』の知的側面である「確かな学力」を確実に身につけさせることが大きな課題となっている。

こうした「確かな学力」を身につけさせるには，学習指導要領に示されている基礎的・基本的な内容の確実な習得・定着のために，「個に応じた指導」の一層の充実を図らなければならない。また，学びの特質に応じた「分かる授業」を行うことにより，児童の意欲を高め自発的な学習を促すことが重要である。

2 本校の教育目標から

本校では「創造的な知性，豊かな情操，健康な体を養い，生きる力を備えた児童を育成する」ことを目標に「進んで学ぶ子ども」「互いを思いやる子ども」「健康でたくましい子ども」をめざす児童像として設定している。これらの目標を具現化するために，本校では特に確かな学力を身につけさせる『学力保証』及び集団生活を通して人間形成を図る『成長保証』を掲げて教育活動に取り組んできた。

分かる授業を通して学力を保証し確かな学力を身につけさせることにより，児童は達成感・成就感を感じ，自己の能力に自信をもって学習に取り組むであろう。また，教師が児童のよさに着目し，引き出す指導を行うならば，児童が互いの長所を認め合い切磋琢磨するであろう。学力を保証することは，このように児童の成長・発達を促す成長保証に通じると考える。

3 これまでの取り組みから

(1) 平成13年度

- ・3学年以上の算数科において，児童の学びの特質に応じた学習形態・指導方法を追求するためにグループ別指導を行った。

(2) 平成14年度

- ・3学年以上の算数科において習熟度別指導を実施した。

(3) 平成15年度

- ・3学年以上の習熟度別指導に加え，1・2学年の少人数指導及び6学年の教科担任制を導入し，全校指導体制のシステム開発による児童の基礎学力の向上に取り組んだ。

(詳しくは，第5章「研究の足跡」参照)

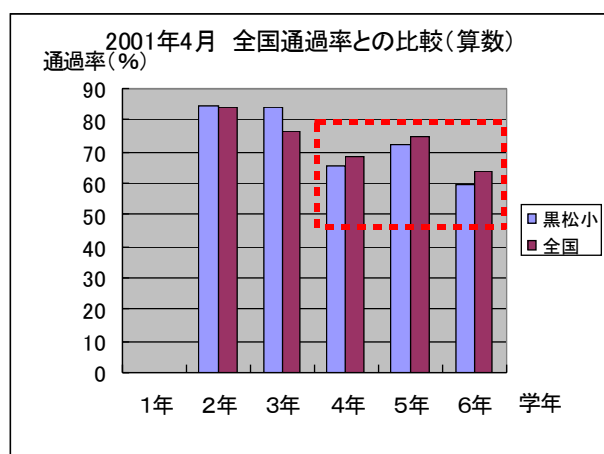
(4) 平成16年度

- ・仙台市教育委員会より自主公開校の認定を受けた。少人数指導・習熟度別指導，教科担任制というシステムを生かした授業づくりに焦点を当て，個々の授業の質的な向上を図るための指導法の改善に研究の重点を置いた。具体的には，児童の学びの特質に応じたきめ細かな指導をすることにより，一人一人の力を伸ばす授業をつくること，興味や関心を喚起し学習意欲を持続させるための魅力ある授業を作ること，教師の指導技術を向上させ得意分野を生かした授業をつくることなどに取り組んだ。

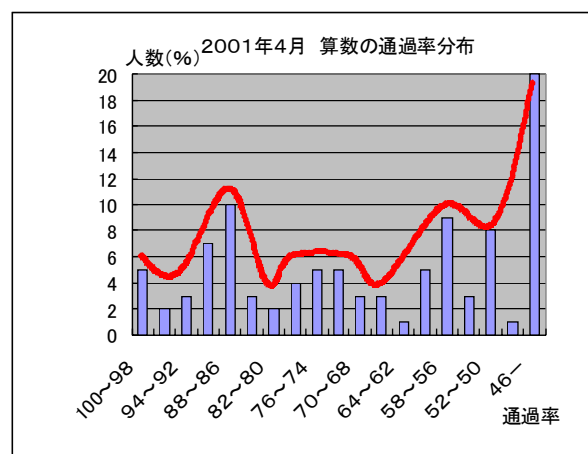
4 児童の実態から

平成13年（2001年）4月に実施した算数の標準学力検査（Criterion Referenced Test ～C R T）では、総合通過率が、2・3学年までは全国平均を上回るものの4学年から6学年の上学年においては全国平均を下回っていた。（図①）また、上学年ほど通過率60%未満の児童が多く見られるという結果になった。（図②）しかし、平成14年度から習熟度別指導を取り入れ全校指導体制を整えてからは、通過率60%未満の児童が減少し、中・高得点層の児童が増加した。どの学年においてもほぼ全国平均を上回る結果を得るなど、全体としての底上げが図られた。また、児童に対する学習意欲に関する調査でも全般に意欲面の向上が見られた。（第5章「研究の足跡」参照）

これらのことから、これまでの本校の取り組みやシステムは、算数科の学力向上に有効な手だてであったと考えられる。



【図① 全国通過率との比較】



【図② 抽出学年の通過率】

全体としての底上げがなされている一方で、少人数で時間をかけ手厚い指導が必要な児童や、理解はできているもののなかなか定着が図られない児童がいる。また、高得点層の中にも既習事項を使いこなす力が不十分で、考えた事柄を自分なりにまとめたり発表したりすることが苦手だという児童が少なくない。このようにそれぞれの児童が抱えている様々な課題に対して、少人数指導や学びの特質に応じる習熟度別指導を一層進めていくことが必要だと考えている。

また、社会全体の価値観の多様化に伴い、児童の興味・関心の対象も広がりを見せるようになってきた。物事を論理的に考えたり関連的に思考したりする力が著しく成長する高学年の時期に、教師の得意分野を生かし質の高い授業を展開できる教科担任制を導入することによって、児童の多様な興味や関心を引き出し「もっと知りたい、できるようになりたい」という意欲を高め、主体的な学びを創り出したいと考えた。

以上の理由により、少人数指導・習熟度別指導、教科担任制を通して、「確かな学力」を身につけさせるために指導法を改善していきたいと考え、本主題を設定した。

Ⅲ 研究主題と副主題について

1 「確かな学力」について

本校でとらえる「確かな学力」とは、平成8年の中央教育審議会答申以来一貫して示されている「生きる力」の知的側面を指しており、「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等まで含めたもの」（文部科学省ホームページより）である。

こうした「確かな学力」は、学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容の確実な習得・定着により身につけさせることができると考える。

2 「指導法の改善」について

指導法の改善の第1の側面は、学校全体で指導体制をシステム化することによる改善である。

算数科において1・2学年では少人数指導、3～6学年では習熟度別指導を行っている。1・2学年では学級担任に1名の加配教員加え、学級を二分割した少人数グループで指導している。3～6学年では各学年2名の加配教員を加えた（学級数+2）グループによる習熟度別指導を行っている。さらに6学年においては、教科担任制を導入している。

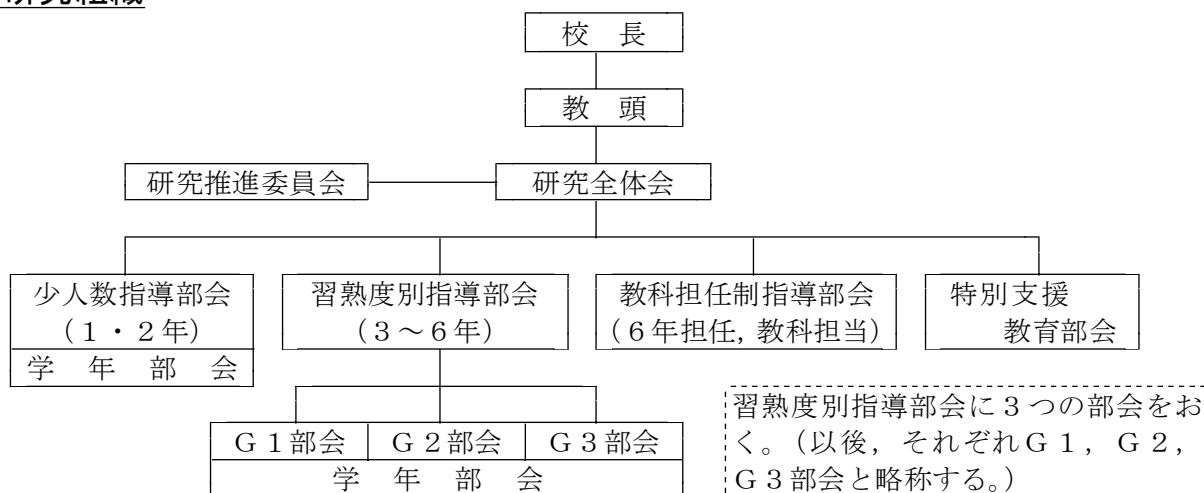
第2の側面は、個々の授業の改善である。

少人数指導や習熟度別指導では、児童の学びの特質に応じた指導を実現するために量的にも質的にもきめ細かな指導を追求している。一方、教科担任制による指導では、授業の質的な改善によって児童の興味・関心を持続させ「分かる授業」を目指している。

IV 研究目標

確かな学力を身につけさせるために、算数科における少人数指導や習熟度別指導、及び6学年の教科担任制を通して指導法の改善を図る。

V 研究組織



- ・グループ3 (G3)・・・「既習事項を振り返りながら、基礎・基本の習得に重点をおくグループ」
- ・グループ2 (G2)・・・「自力解決の力を高めながら、基礎・基本の確実な定着に重点をおくグループ」
- ・グループ1 (G1)・・・「基礎・基本の確実な定着と応用・発展学習に重点をおくグループ」

VI 各部会の主題

○少人数指導部会

「低学年における基礎・基本の習得と確実な定着を図るための指導法の改善」

○習熟度別指導部会

G3部会「基礎・基本の習得を図るための指導法の改善」

G2部会「基礎・基本の確実な定着を図るための指導法の改善」

G1部会「基礎・基本の確実な定着と応用・発展学習を進めるための指導法の改善」

○教科担任制指導部会

「児童のよさを認め、学習意欲を喚起するための指導法の改善」

～6学年における教科担任制を通して～

○特別支援教育部会

「児童一人一人の障害やニーズに応じた指導法の改善」

～算数科における個別の支援を通して～

※基礎・基本について

算数科における「基礎・基本」とは、「児童の生活や学習での様々な活動の基になるものである。例えば、『日常生活での活動の基になるもの』、『学校でのいろいろな学習の基になるもの』、『算数を続けていく基になるもの』、『将来の社会生活や生涯にわたっての活動の基になるもの』などが挙げられる。」（「小学校学習指導要領解説 算数編」より）

本研究では、学習指導要領に示された各学年の目標及び内容を「基礎・基本」ととらえ、基礎・基本の「習得」、「定着」及び「応用・発展学習」については、以下のように考えている。

- 「習得」・・・・・・・・学習した内容を理解し、自分の力で使いこなせる状態。
- 「定着」・・・・・・・・学習した内容を長期に渡って理解しており、いつでも既習事項として自由自在に使いこなせる状態。
- 「応用、発展学習」・・学習内容の理解を深めたり、広げたりする学習。
こうした学習を行うことにより基礎・基本をより確実にすることができ、興味や関心、数学的な考え方を高めることができるものを指す。

Ⅶ 研究の視点

1 指導計画の工夫

- 少人数指導用年間指導計画の作成（１・２学年）
- 習熟度別指導用年間指導計画の作成（３～６学年）
- 選択学習の実施（３～６学年）
- スキル学習年間指導計画及びスキルプリントの作成（１～６学年）

2 指導方法及び指導過程の工夫

- 課題提示の工夫
- 自力解決に導くための工夫
- 児童の考えを生かした学び合いの工夫
- ノート指導の工夫

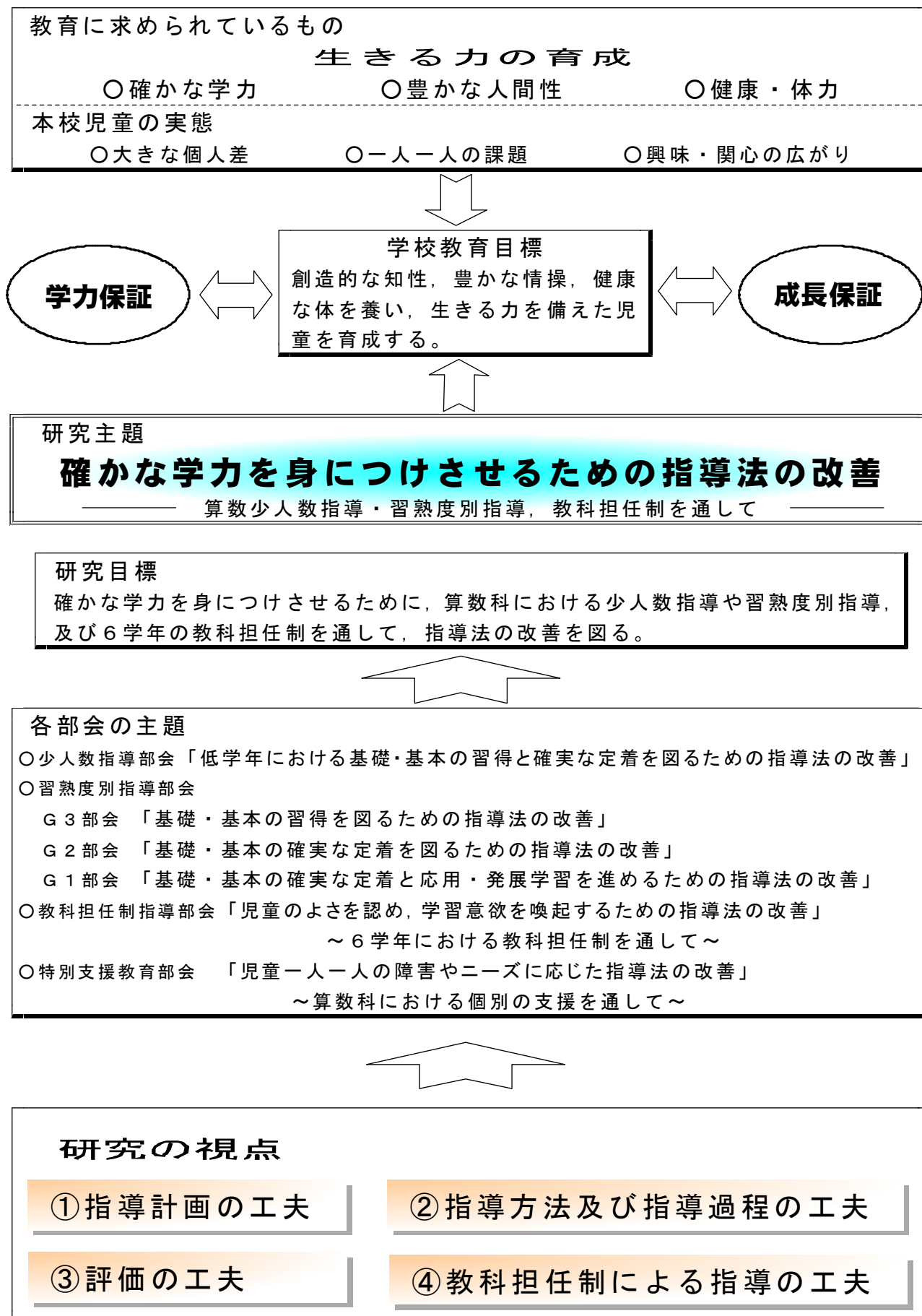
3 評価の工夫

- 学習状況を的確に把握するための各種調査の実施
- 評価規準と判断基準の明確化（年間指導計画への位置づけ）
- 学習チェックカードの作成
- 「基礎・基本の手引き」の作成
- 学習状況を通知する「算数のあゆみ」の作成

4 教科担任制による指導の工夫

- 教科担任制のシステムの開発
- 教科担任制の具体的な取り組み（実践）
- 児童・保護者の意識調査

VIII 研究全体構想図



Ⅸ 研究計画と経過

月	平成 1 6 年度 (1 年 次)	月	平成 1 7 年度 (2 年 次)
4	研究主題，副題の設定 ・ 設定理由 ・ 研究目標	4	2 年次研究の基本計画の検討と確認 研究組織の確立 公開研究会の授業者決定
5	研究体制の確立 ・ 研究計画 ・ 研究組織 ・ 研究方法 ・ 各部会の主題設定 ・ 1 6 年度提案授業者決定	5	部会ごとの研究主題及び概要の検討 学習指導案の形式検討 学習指導訪問に向け，2・4 年指導案検討
6	3 年提案授業の指導案検討 校内授業研究会 ・ 3 年 G 1 グループ提案授業 6 年提案授業の指導案検討	6	学習指導訪問（提案授業） ・ 2 年少人数指導（2 グループ） ・ 4 年習熟度別指導（G 1 ・ G 2 ・ G 3） 学習指導訪問の反省 研究紀要の内容の検討と分担
7	校内授業研究会 ・ 6 年 G 3 グループ提案授業 1 3 年度からの研究実践について，校内 レクチャー	7	相澤秀夫宮城教育大学教授を迎え，学習会 教科担任制指導部会中間報告会 公開当日の日程の決定 公開研究会運営の役割分担
8	少人数・習熟度別指導用年間指導計画作成 スキルプリント作成 各学年の実践について，中間報告 5 年提案授業の指導案検討	8 9	公開授業の単元決定 公開学習指導案形式決定 研究紀要，指導案執筆開始 指導助言者の決定 公開研究会案内状発送・H P 掲載
9	校内授業研究会 ・ 5 年 G 1 ・ G 2 ・ G 3 グループ提案授業 学習指導訪問に向け，2・4 年指導案検討	10	公開学年ミニ研究授業（2 年） ミニ授業検討会 公開授業指導案検討
10	学習指導訪問（提案授業） ・ 2 年少人数指導（2 グループ） ・ 4 年習熟度別指導（G 1 グループ） 学習指導訪問の反省	11	公開学年ミニ研究授業（3・5 年） ミニ授業検討会 公開授業指導案検討 先進校視察・公開研究会参加
11 12	これまでの成果と課題について確認 算数指導に関する保護者アンケート 中間発表会に向け，1・4 年指導案検討	12	研究紀要・学習指導案の印刷・製本 参考資料 C D - R O M 作成
1	校内中間発表会 1（提案授業） ・ 1 年少人数指導（2 グループ） ・ 4 年習熟度別指導（G 1 ・ G 2 ・ G 3）	1	研究紀要・C D - R O M 完成 公開研究会準備 掲示物の作成 公開研究会校内レクチャー
2	校内中間発表会 2 ・ 特別支援教育部会提案授業 標準学力検査【C R T】の実施（全学年） 学習意欲に関する調査の実施（全学年） 先進校視察・公開研究会参加	2	自主公開研究会 公開研究会の反省会 標準学力検査【C R T】の実施（全学年） 学習意欲に関する調査の実施（全学年）
3	1 年次研究のまとめ（研究紀要作成） 次年度研究計画の立案	3	研究のまとめと反省 平成 1 8 年度の研究計画作成